＼イクジイ世代にお伝えしたい／

周産期のこころのこと

信州大学医学部周産期のこころの医学講座の特任講師
村上寛先生による連載コーナーです。
妊娠期から産後の女性とそのご家族のメンタルヘルスに関する
村上先生のコラムをご紹介します。

Theme

薬剤師さんが解説！妊娠と薬の関係。【前編】

妊婦産婦さんに正しく薬を使っていただくために。今回は、私の外来「周産期のこころの外来」をサポートしてくれる薬剤師さんに、「妊娠と薬」について解説いただきます。

【はじめに】

皆さんはじめまして。信州大学医学部附属病院で薬剤師として働いている小澤秀介です。私は大学病院の中でも産婦人科を専門としており、妊婦さんや妊娠を希望している方へ、妊娠中や授乳中の薬の使用についてカウンセリングをしています。カウンセリングでお話をさせていただくと、妊娠中（妊娠と気づかない時期を含む）に飲んだ薬はおなかの赤ちゃんにどのような影響があるのか、薬局で市販されている薬やビタミン剤は安全なのか、というような薬についての疑問や不安を感じている方が非常に多いと感じています。薬を飲んだあとで「おなかの赤ちゃんへの影響は大丈夫かな？」と不安になったり、お母さんにとって必要な薬を飲むのをやめてしまったりする方もいます。今回は、妊娠中の薬の考え方について、多くの方に知っていただきたいと思います。

【妊娠中の薬と先天的な赤ちゃんの病気について】

実は、薬を何も飲んでいない健康な妊婦さんでも、約3%の割合で生まれつき病気を持っている赤ちゃんが産まれます。このうち、病気の原因が薬によるものは1%未満と言われています。もちろん、妊娠中に服用して絶対に安全な薬は存在しませんが、特殊な薬を除いたほとんどの薬は、赤ちゃんへの影響は少ないと考えられています。

【妊娠と薬の考え方】

薬が赤ちゃんにどのように影響するのかは、①どんな種類の薬を飲んだのか、②どのぐらいの期間どのぐらいの量を飲んだのか、③妊娠中のどの時期に薬を飲んだのか、によって決まります。特に、薬の量が多い場合は赤ちゃんに薬が届きやすくなります。また、1回だけしか飲んでいない場合や、毎日続けて飲んでいた場合など、どのぐらいの期間、薬を飲んでいるのかでも届きやすさは変わります。

【妊娠の時期と薬の影響】下の表は妊娠の時期と赤ちゃんへの影響をまとめたものです。

妊娠 0～3週まで
この時期にお母さんが飲んだ薬は、お腹の赤ちゃんに影響することはほとんどありません。

妊娠 4～7週まで
重要な臓器の形成が行われるこの時期は、体の形成において赤ちゃんが最も敏感な時期であり、薬の影響を受けやすい時期になります。

妊娠 8～15週まで
重要な臓器の形成が終わり、赤ちゃんの薬に対する感受性は次第に低下していきますが、まだ薬の影響を受けやすい時期です。

妊娠 16～お産まで
主な臓器形成が完了し、薬の影響リスクは低くなります。ただし、一部の薬は赤ちゃんの成長発達に影響する可能性があります。

赤ちゃんの体が作られている時期に、影響が出やすい薬を飲むと生まれつき病気を持ってしまう可能性が高くなりますが、それ以外の時期では赤ちゃんへの影響は少ないと予想できます。ただ、影響が出やすい時期に薬を飲んだとしても、必ず病気をもった赤ちゃんが生まれるわけではありません。そのため、予期せず妊娠中にお薬を服用しても、主治医の先生と相談しながら、妊娠経過を注意してみていくことがほとんどです。

来月は、妊娠中の市販薬などの使用について、解説します。

村上 寛（むらかみ ひろし）先生
1985年生まれ、
東京都出身。
信州大学医学部周産期のこころの医学講座医師。
三児の父。「周産期、全力を尽くします！」

村上寛先生の公式X（旧 Twitter）
https://x.com/murakamishinshu

村上寛の育児日記

最近は子どもと松本山雅 FCのアウェイの試合に行っています。なかなか勝つことができていませんが、引き続き応援していきます。

編集室では「周産期のこころのこと」に関わる質問を募集します。村上先生にお聞きしたいこと／掲載用住所（市町村名）とペンネームを編集室までお寄せください。